

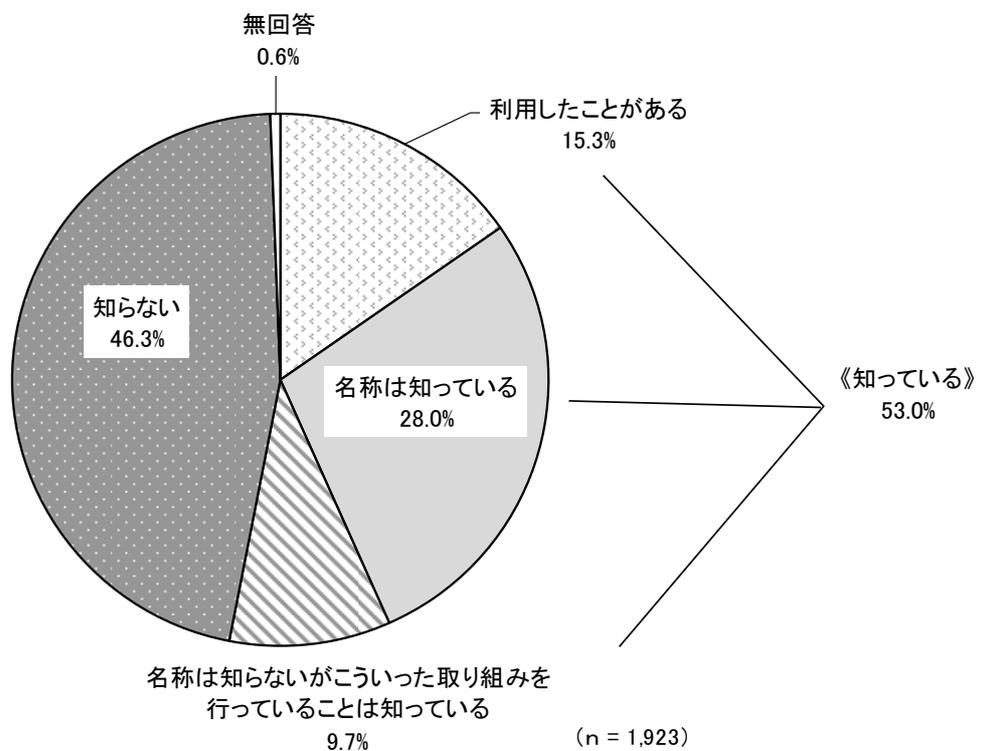
6. 福祉と医療

(1) 「福祉の相談窓口」の認知度

◎ 《知っている》が5割を超え、「利用したことがある」は1割半ば

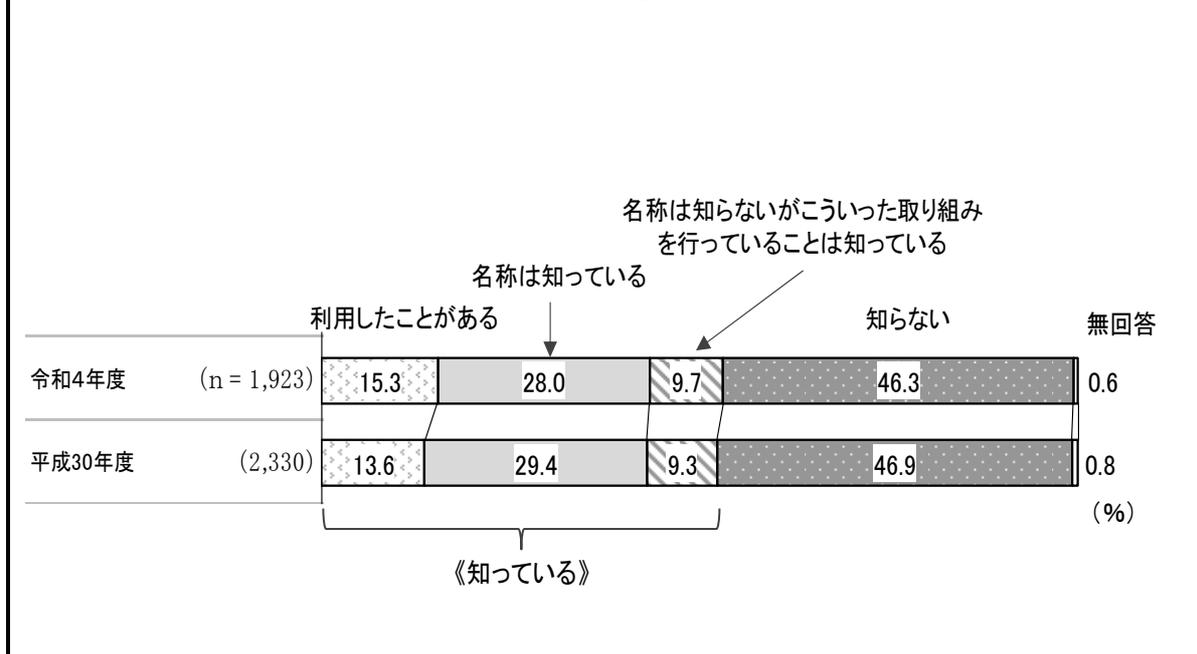
問14 あなたは、区内28地区で実施しているまちづくりセンター、あんしんすこやかセンター（地域包括支援センター）、社会福祉協議会が連携して相談を受ける「福祉の相談窓口」を知っていますか。（〇は1つ）

図6-1-1



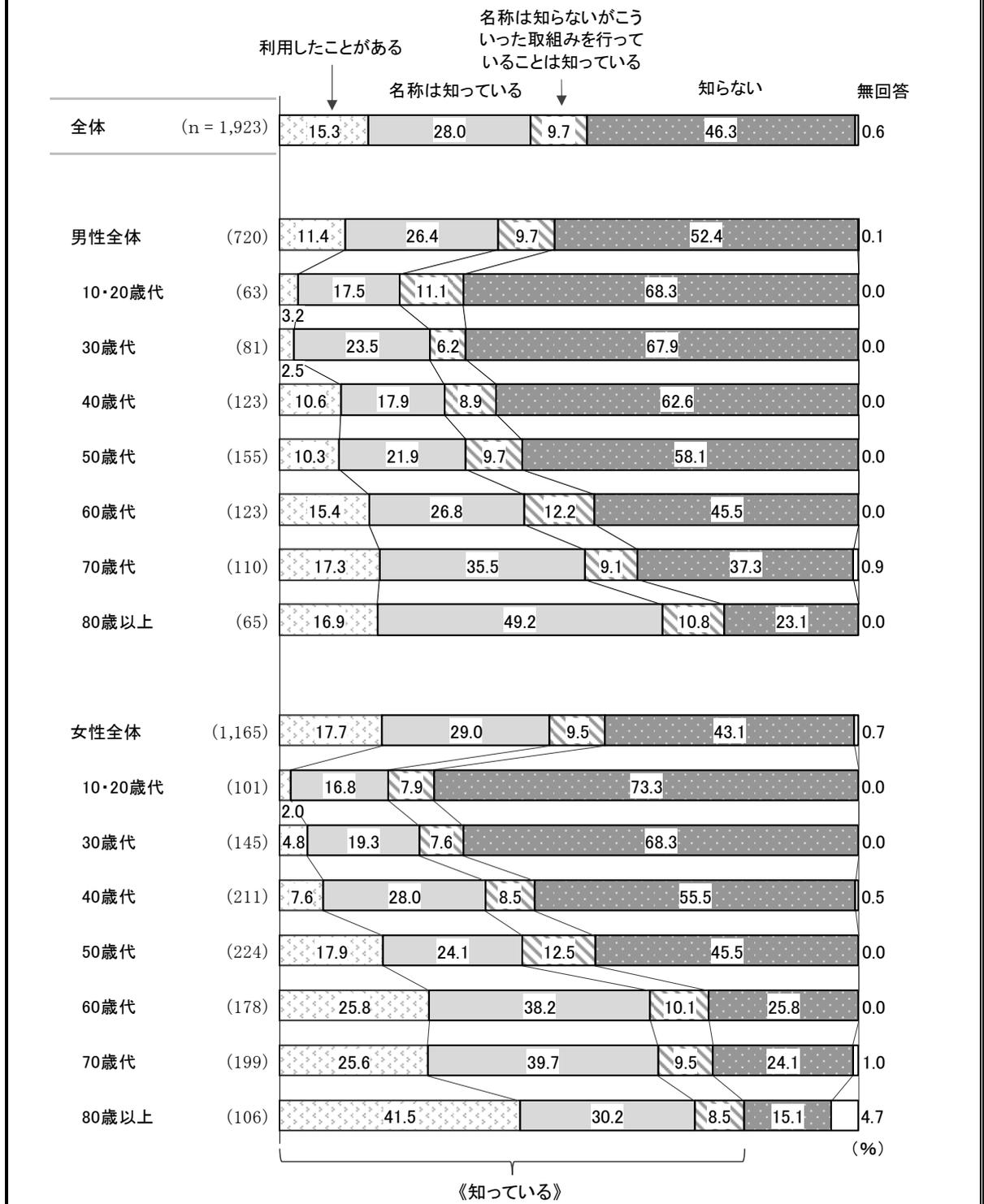
「福祉の相談窓口」の認知度を聞いたところ、「名称は知っている」（28.0%）、「利用したことがある」（15.3%）、「名称は知らないがこういった取り組みを行っていることは知っている」（9.7%）を合わせた《知っている》（53.0%）が5割を超え、「知らない」（46.3%）は4割半ばとなっている。（図6-1-1）

図6-1-2 「福祉の相談窓口」の認知度（時系列）



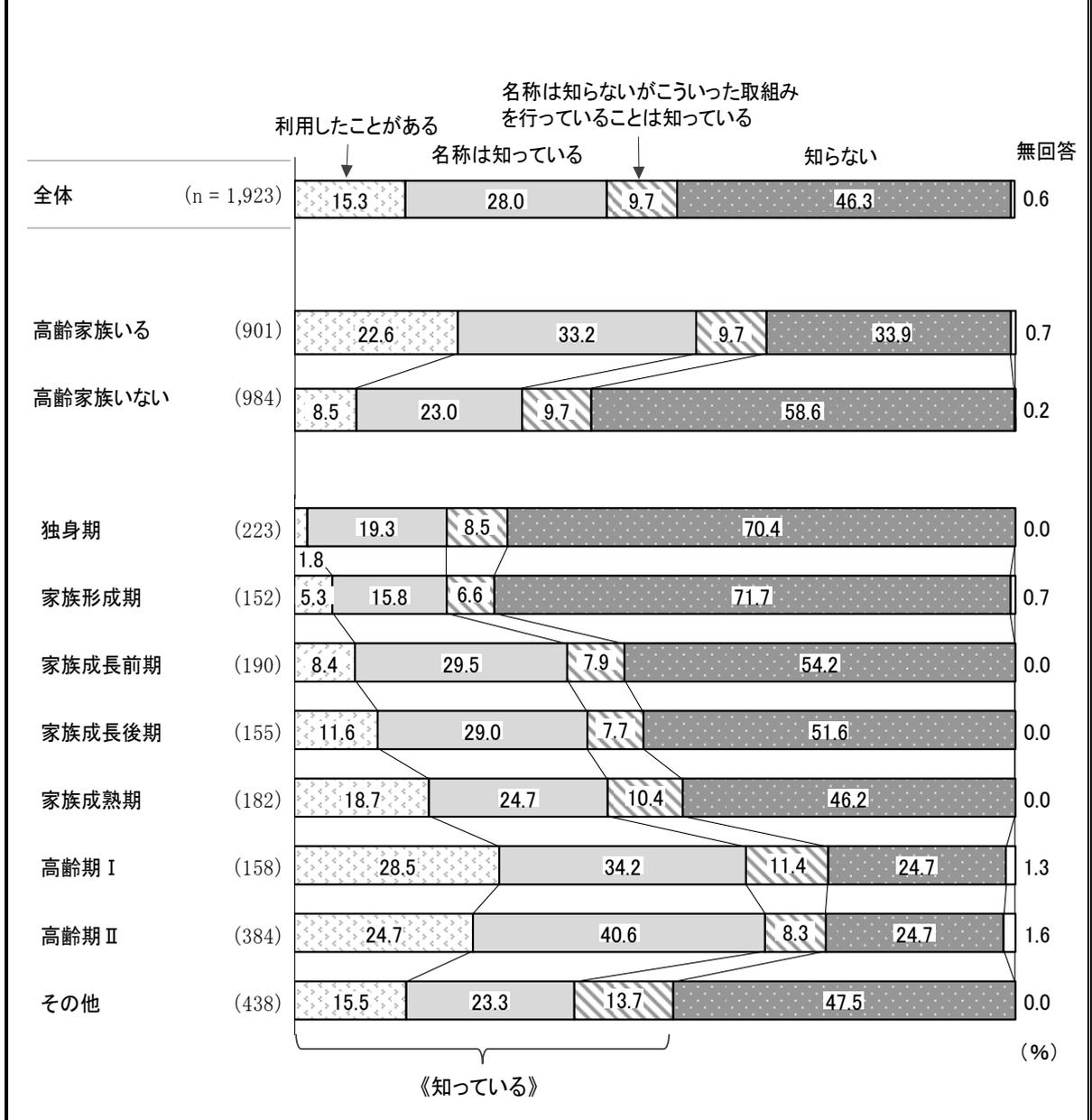
平成30年度からの時系列の変化をみると、《知っている》は平成30年度（52.3%）から令和4年度（53.0%）で大きな違いはみられない。（図6-1-2）

図 6-1-3 「福祉の相談窓口」の認知度（性・年齢別）



性・年齢別にみると、「知っている」は、男性、女性ともに年代が上がるにつれ高くなる傾向がみられ、女性の80歳以上で8割、男性の80歳以上で8割近くとなっている。「利用したことがある」は女性の80歳以上で4割を超えている。（図6-1-3）

図6-1-4 「福祉の相談窓口」の認知度（高齢家族の有無別・ライフステージ別）



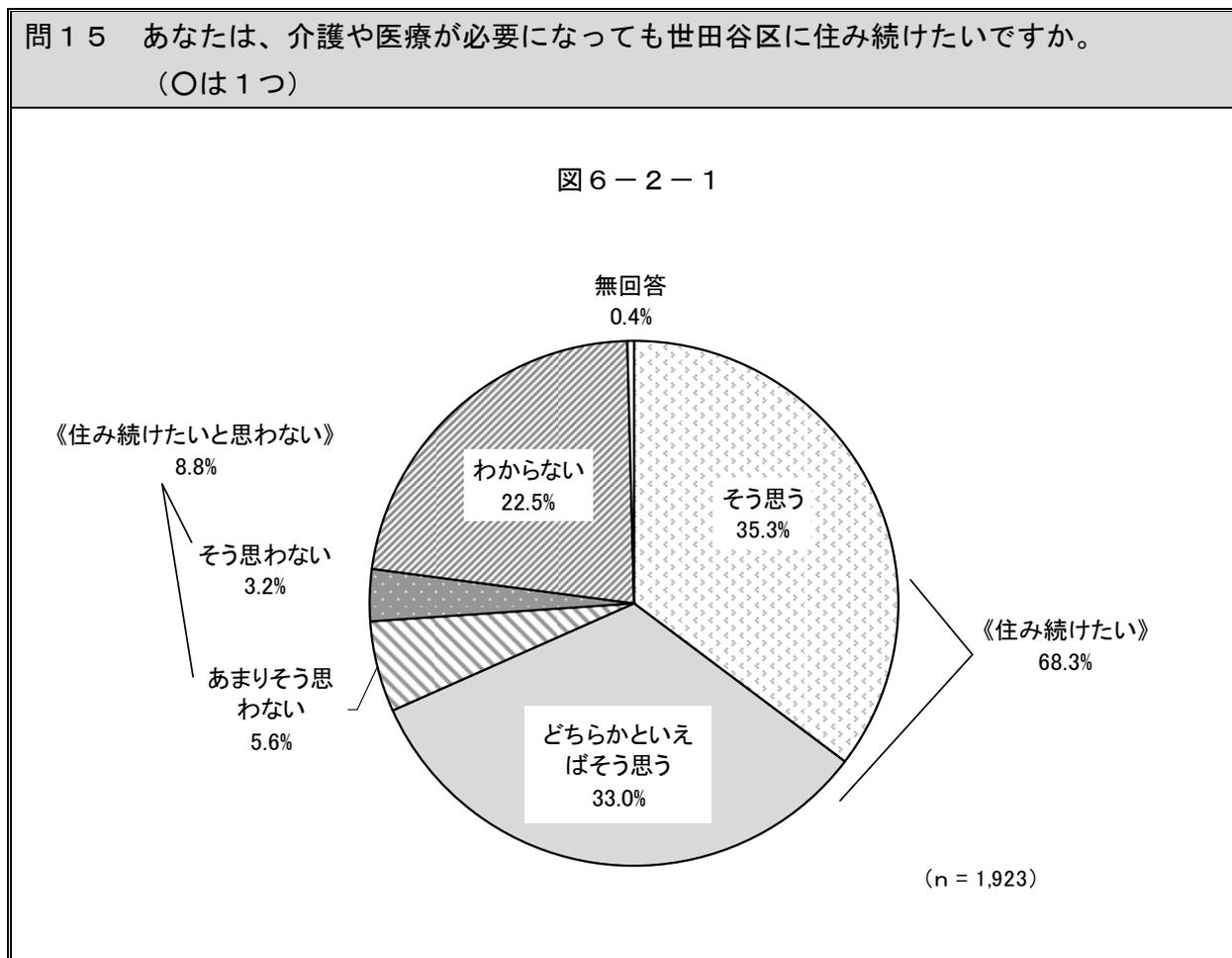
高齢家族の有無別にみると、高齢家族がいる世帯は「利用したことがある」が2割を超え、「名称は知っている」が3割を超えて、高齢家族がいない世帯より高い。

ライフステージ別にみると、「利用したことがある」は高齢期Ⅰで3割近く、高齢期Ⅱで2割半ばとなっている。《知っている》は高齢期Ⅰが7割半ば、高齢期Ⅱが7割を超えている。

(図6-1-4)

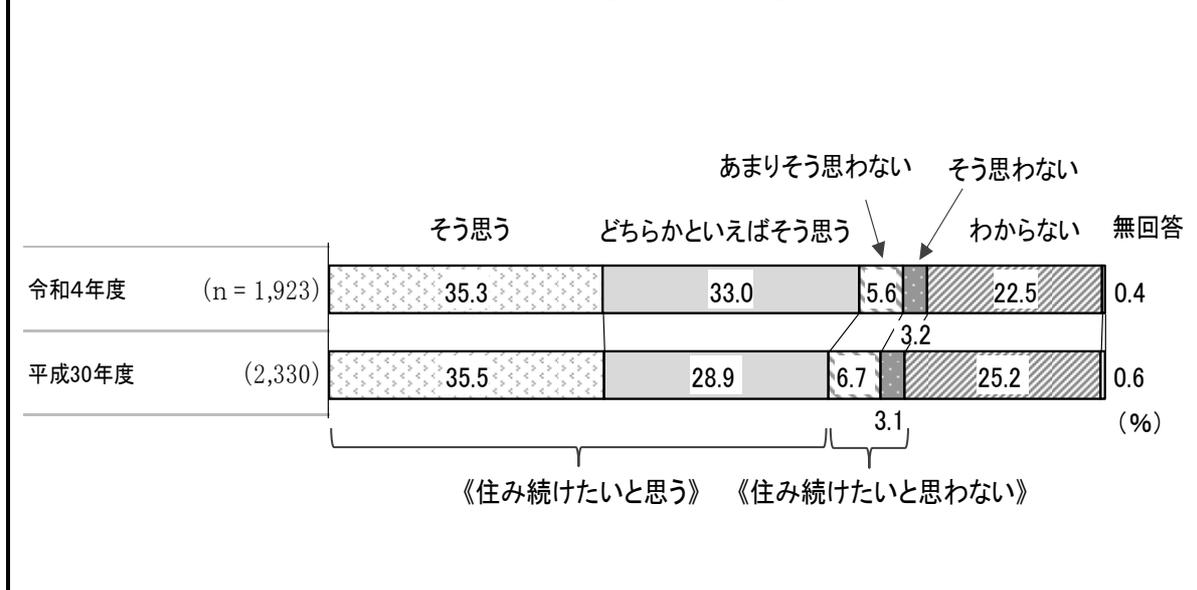
(2) 介護や医療必要時の居留意向

◎ 《住み続けたい》が7割近く



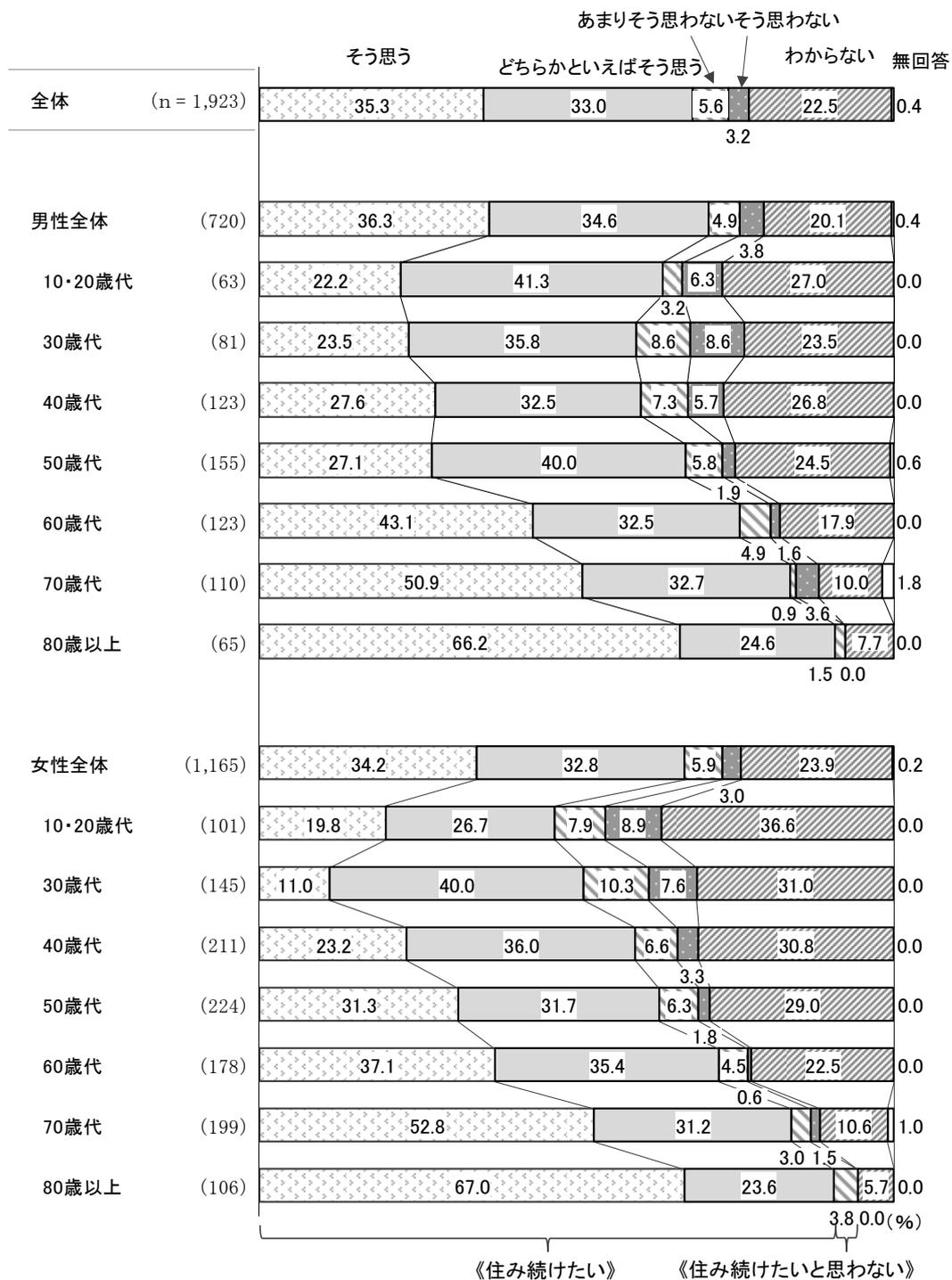
介護や医療必要時の世田谷区への居留意向について聞いたところ、「そう思う」（35.3%）と「どちらかといえばそう思う」（33.0%）を合わせた《住み続けたい》（68.3%）が7割近く、「あまりそう思わない」（5.6%）と「そう思わない」（3.2%）を合わせた《住み続けたいと思わない》（8.8%）は1割近くとなっている。（図6-2-1）

図6-2-2 介護や医療必要時の居留意向（時系列）



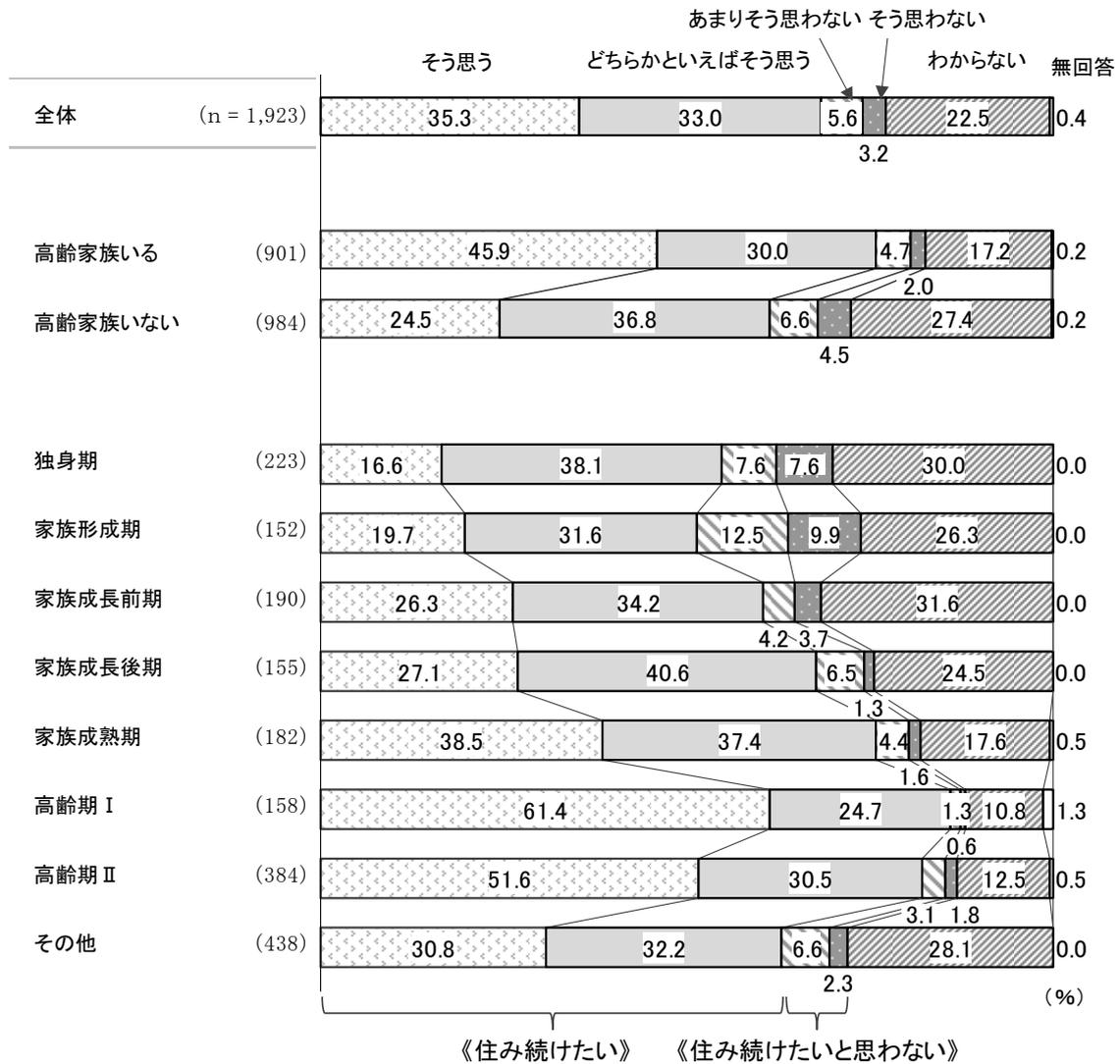
平成30年度からの時系列の変化をみると、《住み続けたいと思う》は平成30年度（64.4%）から令和4年度（68.3%）で増加している。《住み続けたいと思わない》は平成30年度（9.8%）から令和4年度（8.8%）で大きな違いはみられない。（図6-2-2）

図 6-2-3 介護や医療必要時の居留意向（性・年齢別）



性・年齢別にみると、年代が上がるにつれ《住み続けたい》が高くなる傾向にあり、男性の80歳以上、女性の80歳以上でほぼ9割となっている。《住み続けたいと思わない》は、女性の10・20歳代、30歳代、男性の30歳代が2割近くとなっている。（図6-2-3）

図6-2-4 介護や医療必要時の居留意向（高齢家族の有無別・ライフステージ別）

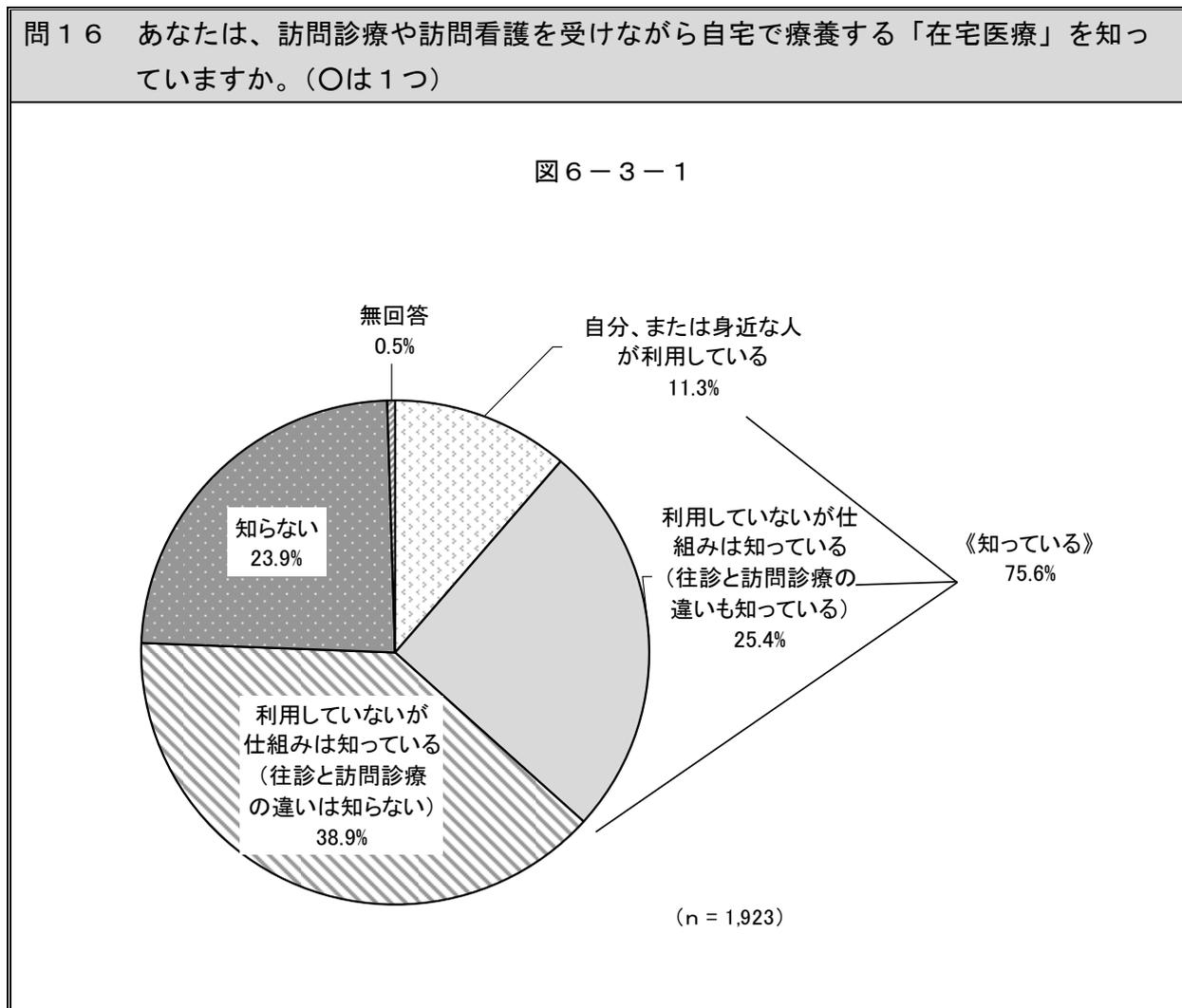


高齢家族の有無別にみると、《住み続けたい》は高齢家族がいる世帯で7割半ば、高齢家族がいない世帯で6割を超えている。「そう思う」は高齢家族がいる世帯で4割半ばとなっている。

ライフステージ別にみると、《住み続けたい》は高齢期 I が8割半ば、高齢期 II が8割を超えて、そのうち、「そう思う」は高齢期 I が6割、高齢期 II が5割を超えている。《住み続けたいと思わない》は家族形成期が2割を超えている（図6-2-4）

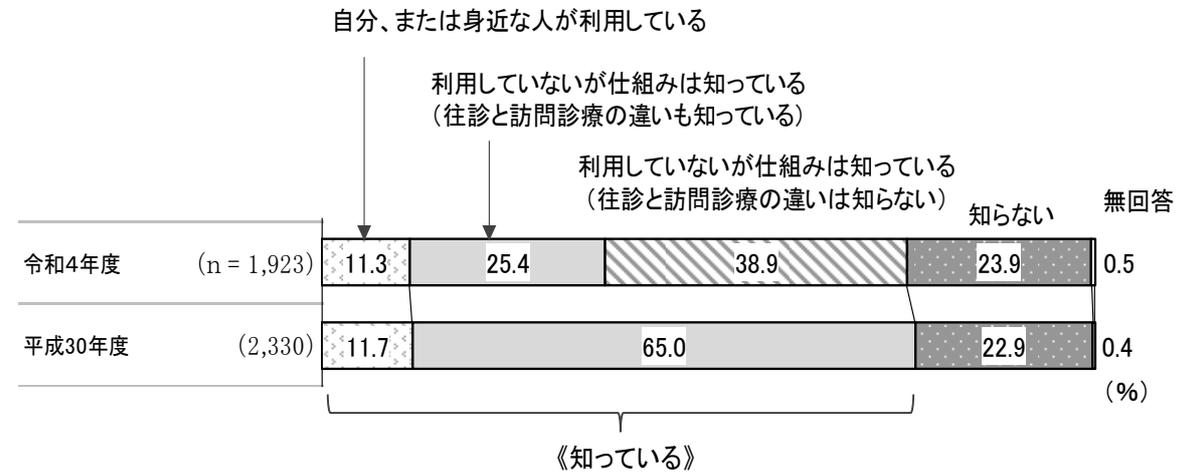
(3) 「在宅医療」の認知度

◎ 《知っている》が7割半ば、「自分、または身近な人が利用している」は1割を超える



「在宅医療」の認知度を聞いたところ、「利用していないが仕組みは知っている (往診と訪問診療の違いは知らない)」（38.9%）が4割近く、「利用していないが仕組みは知っている (往診と訪問診療の違いも知っている)」（25.4%）、「自分、または身近な人が利用している」（11.3%）と合わせた《知っている》（75.6%）が7割半ばとなっている。（図6-3-1）

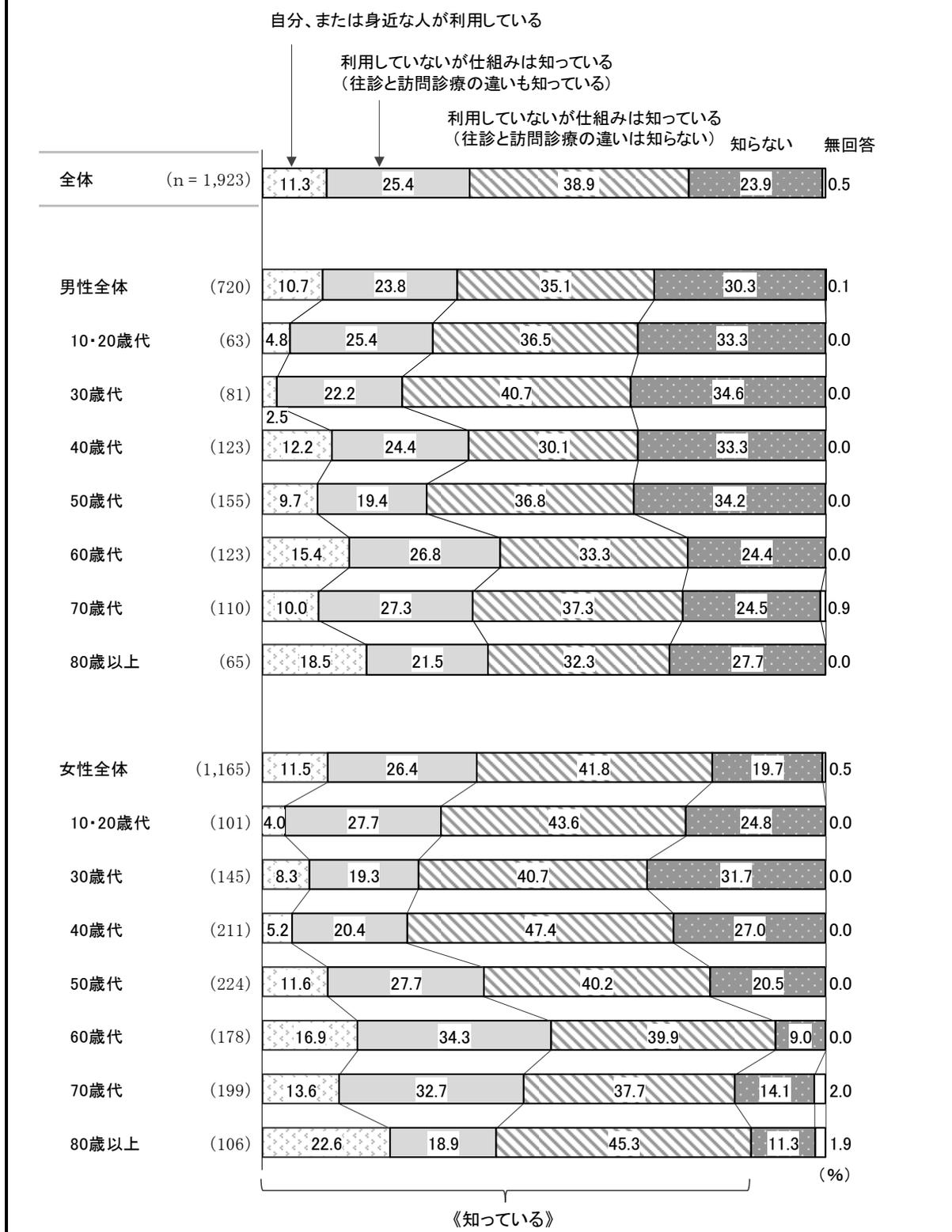
図 6-3-2 「在宅医療」の認知度（時系列）



※平成 30 年度調査では、「利用していないが仕組みは知っている」はひとつの選択肢でした。

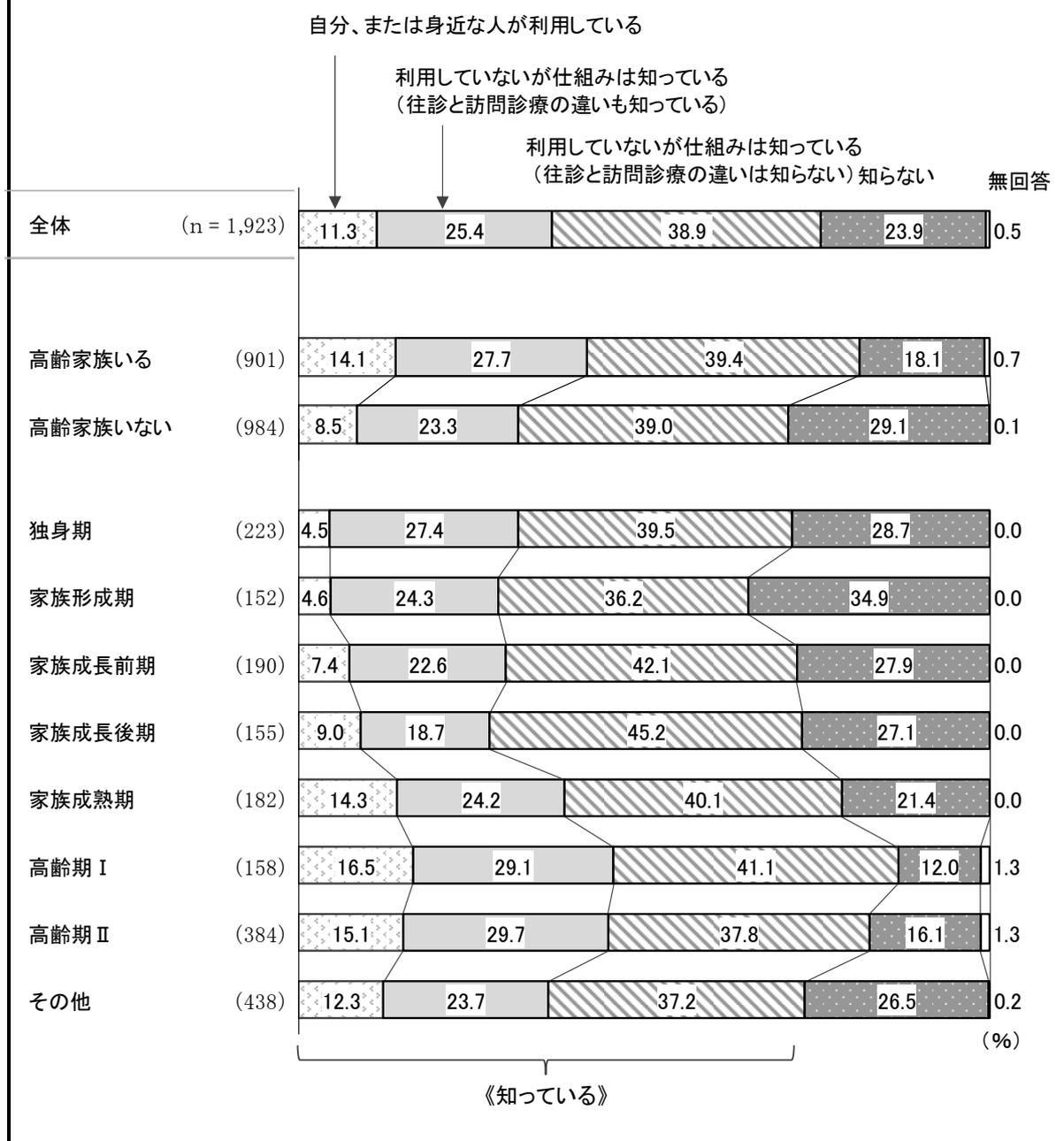
平成 30 年度からの時系列の変化をみると、《知っている》は平成 30 年度 (76.7%) から令和 4 年度 (75.6%) で大きな違いはみられない。(図 6-3-2)

図 6-3-3 「在宅医療」の認知度（性・年齢別）



性・年齢別にみると、《知っている》はいずれの年代も男性より女性の方が高く、特に女性の60歳代で9割を超えている。(図6-3-3)

図6-3-4 「在宅医療」の認知度（高齢家族の有無別・ライフステージ別）

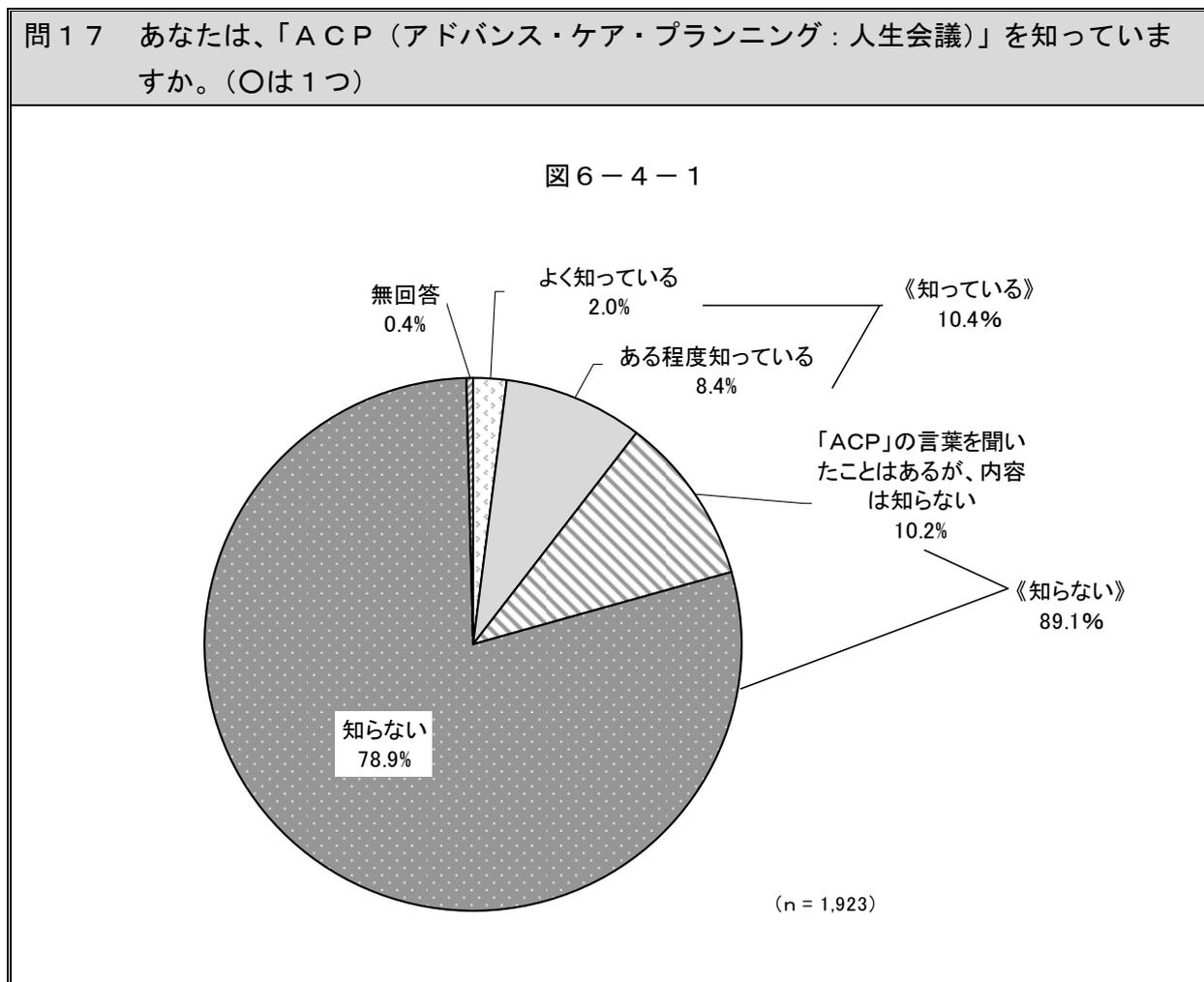


高齢家族の有無別にみると、「自分、または身近な人が利用している」の割合は高齢家族がいる世帯で1割半ばで、高齢家族がいない世帯より高くなっている。

ライフステージ別にみると、「自分、または身近な人が利用している」と「利用していないが仕組みは知っている（往診と訪問診療の違いも知っている）」を合わせた割合は、高齢期 I と高齢期 II で4割半ばと、他の層よりも高くなっている。（図6-3-4）

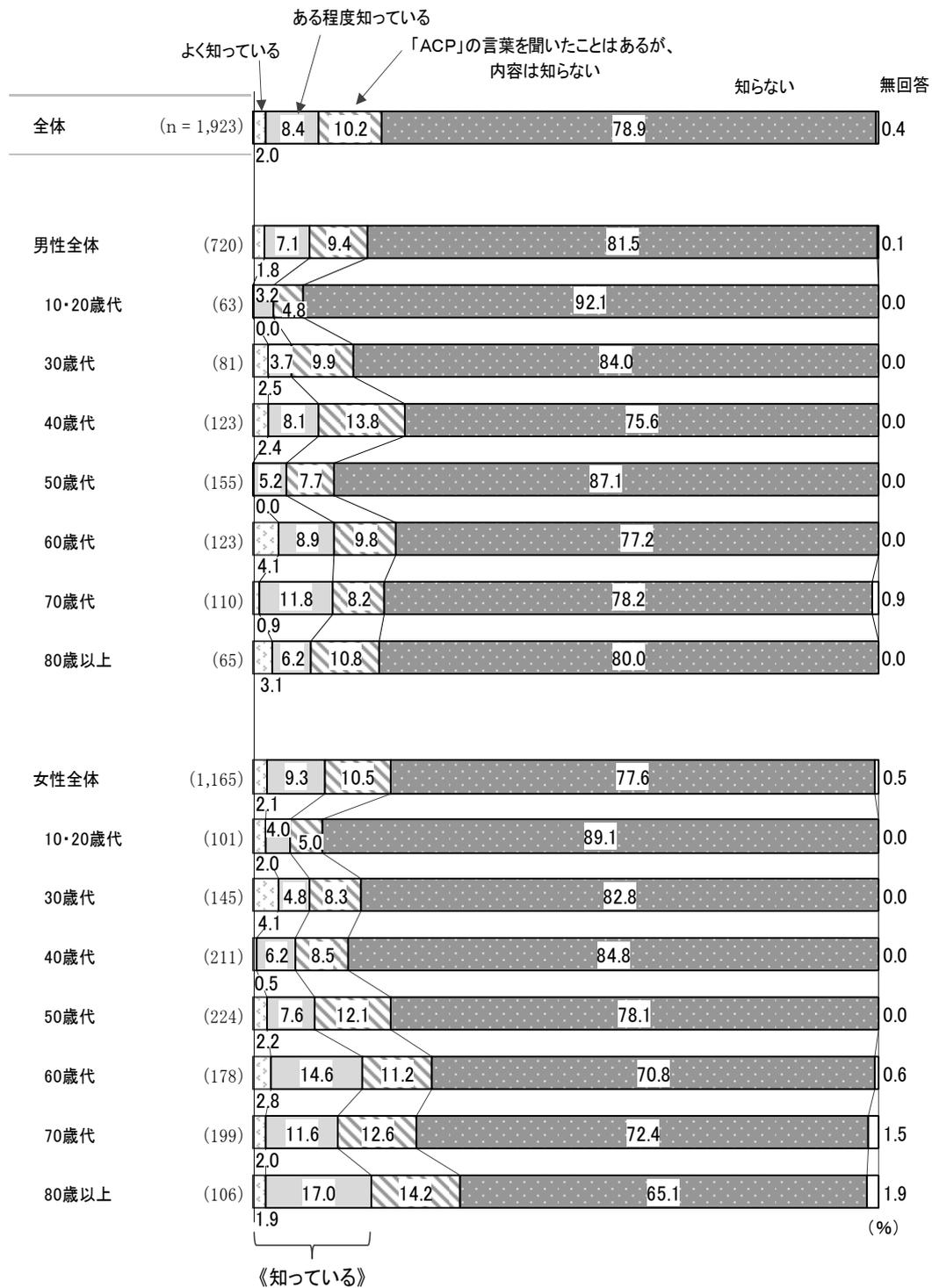
(4)「ACP」(アドバンス・ケア・プランニング：人生会議)の認知度

◎「知らない」が8割近く、《知っている》は1割



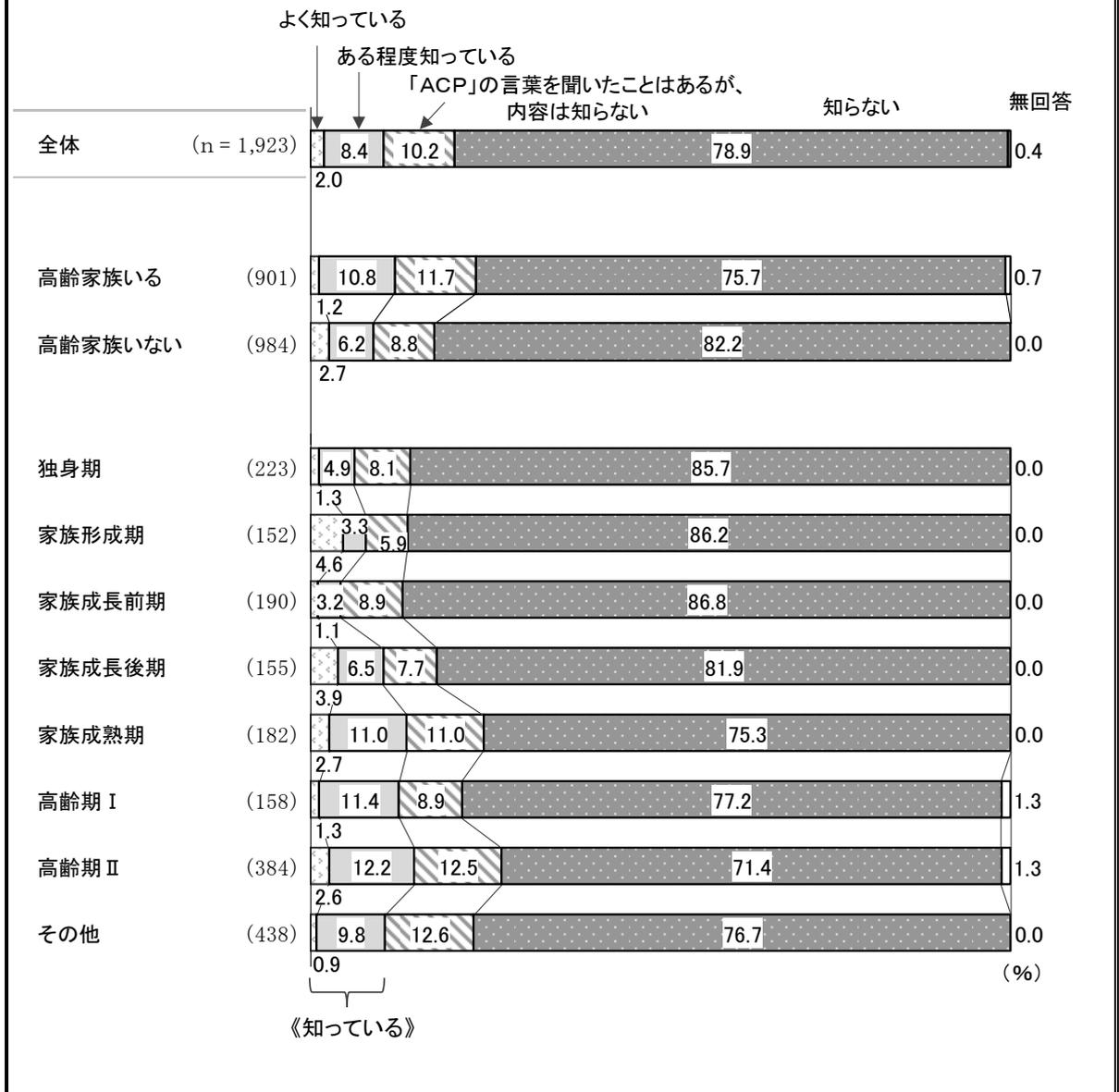
「ACP」の認知度を聞いたところ、「知らない」(78.9%)が8割近くと最も高く、「「ACP」の言葉を聞いたことはあるが、内容は知らない」(10.2%)を合わせた《知らない》(89.1%)はほぼ9割、「ある程度知っている」(8.4%)と「よく知っている」(2.0%)を合わせた《知っている》(10.4%)は1割となっている。(図6-4-1)

図6-4-2 「ACP」の認知度（性・年齢別）



性・年齢別にみると、「知らない」は男性10・20歳代で9割を超え、女性10・20歳代でほぼ9割と高くなっている。一方「ある程度知っている」、「よく知っている」を合わせた《知っている》が、女性の80歳以上で2割近くとなっている。（図6-4-2）

図6-4-3 「ACP」の認知度（高齢家族の有無別・ライフステージ別）

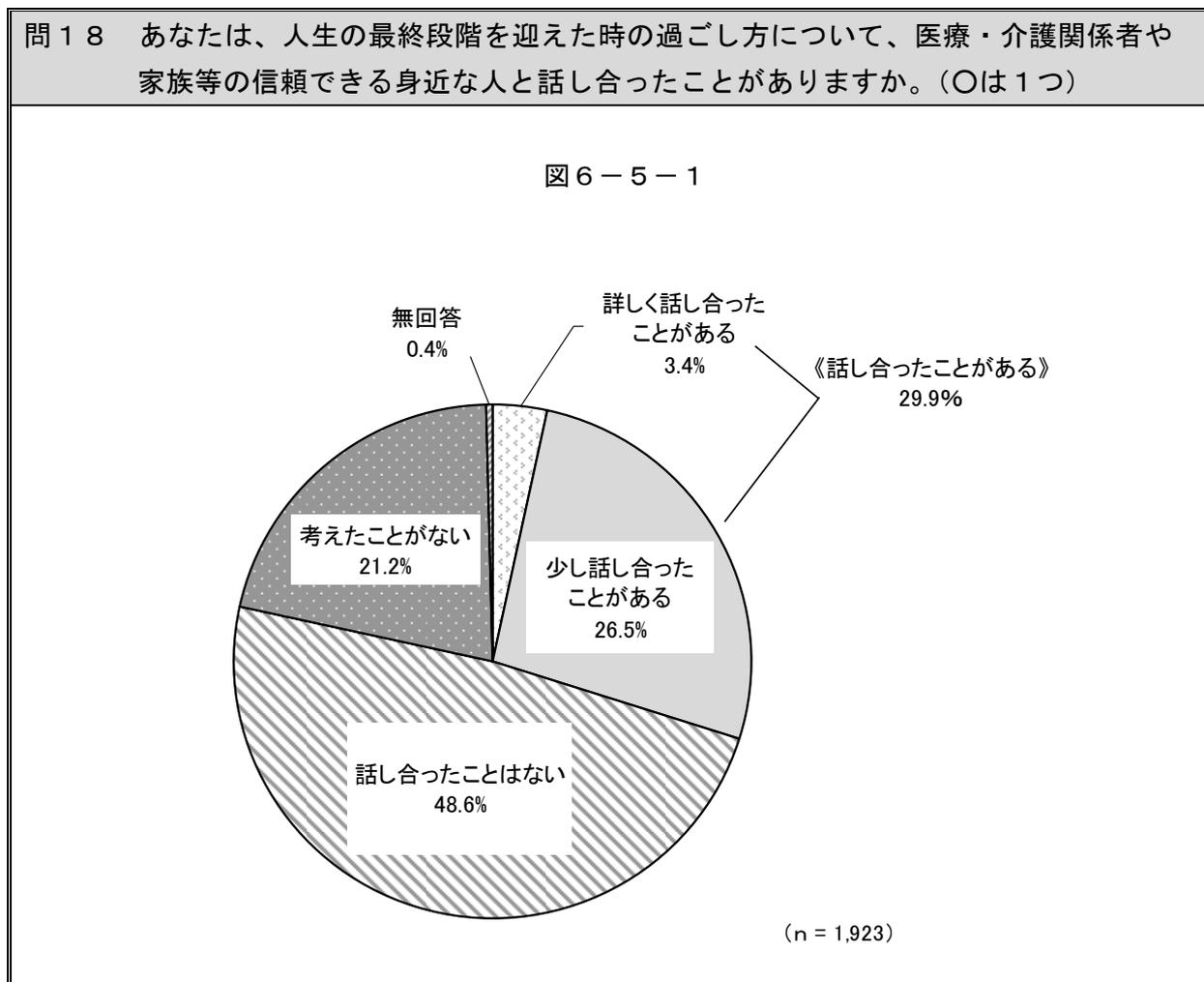


高齢家族の有無別にみると、《知っている》の割合は高齢家族がいる世帯で1割を超え、高齢家族がいない世帯より高くなっている。

ライフステージ別にみると、「知らない」の割合は独身期、家族形成期、家族成長前期で8割半ばとなっている。（図6-4-3）

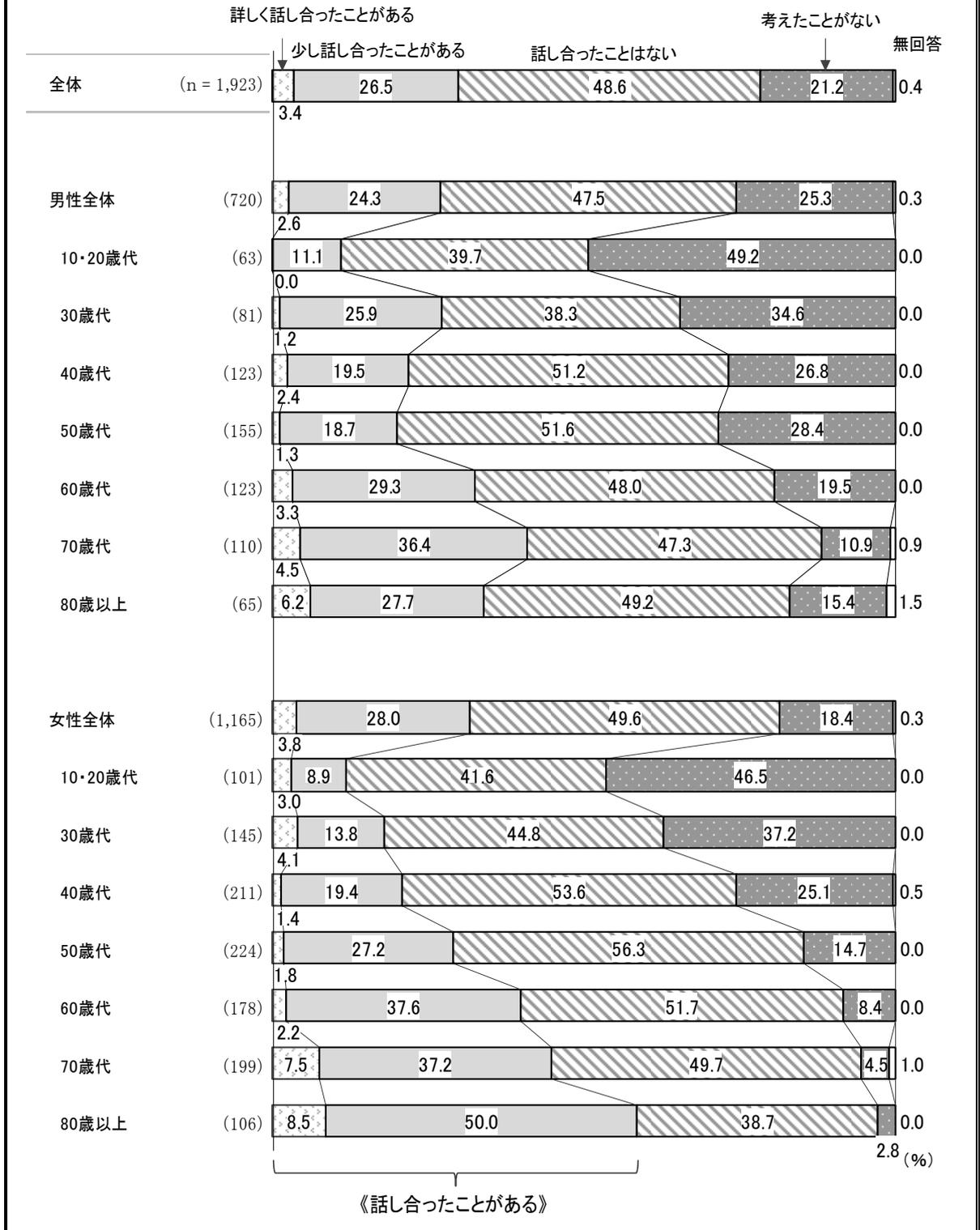
(5) 人生の最終段階に関する話し合いについて

◎ 「話し合ったことはない」が5割近く、《話し合ったことがある》は3割



人生の最終段階についての話し合いの有無を聞いたところ、「話し合ったことはない」(48.6%)が5割近くと最も高く、「詳しく話し合ったことがある」(3.4%)と「少し話し合ったことがある」(26.5%)を合わせた《話し合ったことがある》(29.9%)は3割、「考えたことがない」(21.2%)は2割を超えている。(図6-5-1)

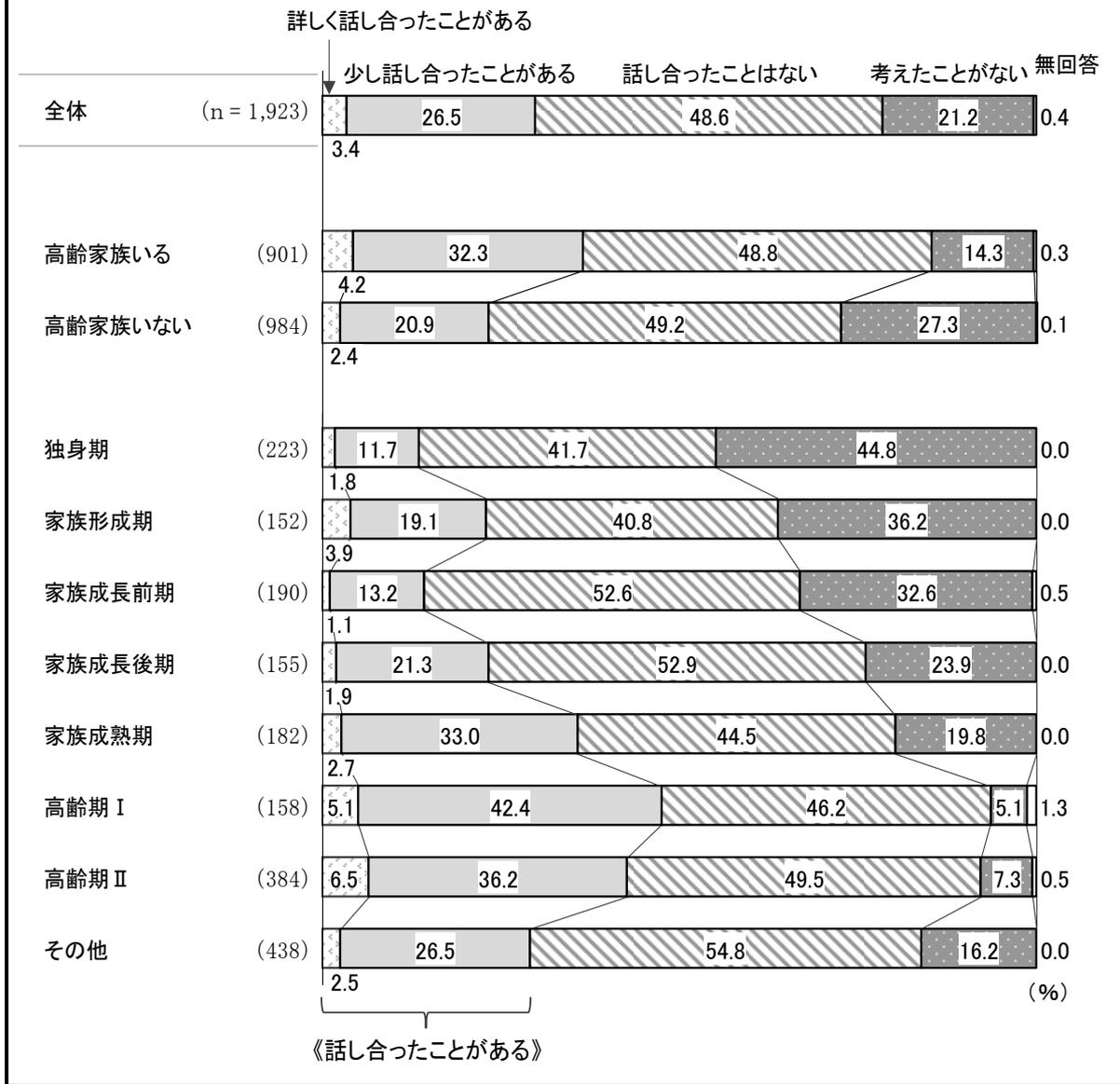
図6-5-2 人生の最終段階についての話し合いの有無（性・年齢別）



性・年齢別にみると、「詳しく話し合ったことがある」と「少し話し合ったことがある」を合わせた《話し合ったことがある》の割合は、女性80歳以上で6割近くと高くなっている。

(図6-5-2)

図 6-5-3 人生の最終段階についての話し合いの有無
(高齢家族の有無別・ライフステージ別)



高齢家族の有無別にみると、「詳しく話し合ったことがある」と「少し話し合ったことがある」を合わせた《話し合ったことがある》の割合は高齢家族がいる世帯で4割近くで、高齢家族がない世帯より高くなっている。

ライフステージ別にみると、「考えたことがない」の割合は独身期で4割半ばとなっている。(図6-5-3)